

Title	空間の表象としての人形：山形県飽海郡遊佐町の場合
Sub Title	Doll as a representation of space: a case study of Yuza town of Yamagata prefecture in Japan
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.1- 34
JaLC DOI	
Abstract	In this paper I will analyze the folk custom of a doll made of straw to stand on the border of the village at the time of spring festival. In Yuza town of Yamagata prefecture such custom has been called YASARA, and was conducted by young men or small children supported by each houses under the aid of the village committee members. YASARA was conducted at many palaces in those days, but nowadays this is conducted at only three villages, Hirazu, Tarukawa and Nakayama. The purpose of YASARA festival is to make a doll of straw praying for deities to get a good harvest of paddy and to make calm the weather. At the last stage of the ritual, villagers, especially young men and children, bring the dolls by hand and go to on the border of the village to throw it away or to burn. The purpose of it is to push away the bad spirits, which are believed to give the bad effects for them. As discussed by YANAGITA Kunio, a great scholar of folklore studies, the custom to make a temporary straw doll and give the offerings is to invite deities and send them off to the other world. Prof. KAMINO Yoshiharu presupposes the new concept of Border Deity of the doll (Ningyo Dosojin) of which role is to protect against bad spirits from the outside of the village as permanent form. He had collected many case studies and tried to demonstrate his hypothesis in Tohoku area. After discussing about these antecedent studies, I try to explain YASARA festival by the point of view on the straw doll as a representation of space, so that the most important ritual aspect of the doll may be summoned the particular memory and emotion concerning upon the "place" as a part of the space designated by the ritual procedure. The dialectic capability of the doll ritual shows us the interaction of forms, stuffs and deities by the multi dimension affect through the mediating function. This analysis find out the new meanings of places and social metaphor of the space. The doll is the conjunction of deities and human beings constructed by the logic of the analogy and show the liminal power between this world and the other world. The concept of the representation of space will be apply to analyze the folk customs not only the doll but also many other phenomenon in folk society.
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

空間の表象としての人形

——山形県飽海郡遊佐町の場合——

— 鈴木 正 崇* —

Doll as a Representation of Space: A Case Study of Yuza Town of Yamagata Prefecture in Japan

Masataka Suzuki

In this paper I will analyze the folk custom of a doll made of straw to stand on the border of the village at the time of spring festival. In Yuza town of Yamagata prefecture such custom has been called YASARA, and was conducted by young men or small children supported by each houses under the aid of the village committee members. YASARA was conducted at many palaces in those days, but nowadays this is conducted at only three villages, Hirazu, Tarukawa and Nakayama. The purpose of YASARA festival is to make a doll of straw praying for deities to get a good harvest of paddy and to make calm the weather. At the last stage of the ritual, villagers, especially young men and children, bring the dolls by hand and go to on the border of the village to throw it away or to burn. The purpose of it is to push away the bad spirits, which are believed to give the bad effects for them.

As discussed by YANAGITA Kunio, a great scholar of folklore studies, the custom to make a temporary straw doll and give the offerings is to invite deities and send them off to the other world. Prof. KAMINO Yoshiharu presupposes the new concept of Border Deity of the doll (Ningyo Dosojin) of which role is to

* 慶應義塾大学文学部教授

protect against bad spirits from the outside of the village as permanent form. He had collected many case studies and tried to demonstrate his hypothesis in Tohoku area. After discussing about these antecedent studies, I try to explain YASARA festival by the point of view on the straw doll as a representation of space, so that the most important ritual aspect of the doll may be summoned the particular memory and emotion concerning upon the “place” as a part of the space designated by the ritual procedure.

The dialectic capability of the doll ritual shows us the interaction of forms, stuffs and deities by the multi dimension affect through the mediating function. This analysis find out the new meanings of places and social metaphor of the space. The doll is the conjunction of deities and human beings constructed by the logic of the analogy and show the liminal power between this world and the other world. The concept of the representation of space will be apply to analyze the folk customs not only the doll but also many other phenomenon in folk society.

Key words: space, place, representation, doll, folklore

1. はじめに

東北地方から関東東部にかけて、藁人形や草人形を作って村境に立てたり、流したりする習俗がある。人形の機能には、五穀豊饒や村内安全の祈願をするだけでなく、災厄を賦与して村境から外に追い出す排除の効果を期待するものや、疫病などの災厄が村に入るのを防ぐために境界に置いて防御することなどが挙げられる。人形の作り手は、地域共同体であるムラや字が単位になることが多いが、特定の家が担い手になる場合もある。

人形は、人間に似せてヒトガタを作る場合と、神霊を形象化してカミとして可視化する場合があり、双方向的である。いずれにしても、人形には人間と神霊、ヒトとカミの狭間で揺れ動くものをカタチにしたいという意志があり、何かに似せて形象化を試みるという「類似」の思想を根底に持つ点では「象徴」と呼ぶことができるが、立てる場所や移動の経路に注目

して空間の表象に読み替えることも可能であろう。本稿は山形県遊佐町のヤサラの事例を取り上げ、人形を介して地域社会の人々が空間を通して何かの意味を喚起し、機能する過程を考察し、社会を語る隠喩や、場所と記憶の結合の接点を人形に見るという視点から、なぜ人々は特定の場の人形を作るのかを解き明かす試みを行う。

2. 先行研究の検討

人形に関する民俗学的研究の嚆矢は「神送り与人形」(1934年)と題する柳田国男の論考であろう[柳田 1969]。その構成は、「1. 年中行事と臨時祭. 2. 蟲送り. 3. 送らるるもの色々. 4. ミサキ送り. 5. 水追ひ火追ひ. 6. 送り場. 7. 神座と食器. 8. 鹿島舟, 鹿島人形. 9. 実盛と弥五郎. 10. 送り物の馬. 11. 神二体. 12. 女性の神とコト祭. 13. 総括的な神送り. 14. 起源論の効用」からなり、人形の祭祀形態、その種類、送るモノと送る場、女性の関与などを考察し、災厄を担って送り出される神霊、いわゆる神送りの機能に焦点をあてて考察している。一方、人形について広く事例を集めた神野善治は、道祖神と人形の関係を追求して、中部日本で小正月を祭日とし、主として石造りの道祖神として祀られる習俗と、東北日本から関東東部の年中行事として村境に立てられる人形の神との連続性を「境の神」として把握し、後者を「人形の民俗」と「道祖神信仰」の習俗が重り合う「人形道祖神」と名づけて、従来の石造物中心に検討されてきた道祖神の研究の転換を試みた[神野 1996: 15]。道祖神は塞の神とも呼ばれて、ムラの入口、辻、ムラ境などに神像、石塔、男根状の石などとして祀られ、ムラに悪病や災いが入るのを防ぎ、道行く人の安全を守るとされ、縁結びの神でもある。結論は、東北や関東の大人形には、「道祖神としての基本的性格」と「人形神という形態・形式上の共通項」が見出せるとし、「追放されるべき災厄が集積されることによって、時間的・空間的な境界を守護する新たな神霊としての力を獲得した」[神野 1996:

21]と考えると、「追放され排除される」人形ではなく、疫病や不幸がムラに入ってこないようにする「防御機能」を持つ点に「人形道祖神」の特徴を見出して、祀られる神としての人形を強調した。

しかし、道祖神は東北地方ではドウロクジンとして、石塔や男根状の石として祀られるが、さほど多くはない。一方、藁人形の名称は様々で、ニンギョウ（人形）、ショウキ（鐘馗）、カシマ（鹿島）、ニオウ（仁王）、ドンジン（土人、道神）、ジンジョ（地藏）など、その他にテンノウ（天王）、テング（天狗）、オオスギ（大杉）、カゼガミ（風神）と呼ばれている。道祖神の概念が乏しい東北地方の人形に「道祖神」の名称を賦与することや、多様な人形のあり方を一元化して「人形道祖神」という神観念に特化して防御機能を重視して類型化することは再検討を要する。大人形でも川に流される事例もあり、人形自体が両義性を帯び、祀り上げと祀り棄ての双方が展開して、広い意味のモノの供養との接合もある[松崎2004]。各地の人形の事例から類似の信仰を見つけ出し、素材と形態を考慮して類型化する方法ではなく、人形の移動の道筋や、立てられる場など、依拠する地域の実態に注目して、人形を空間の表象として把握する方向性を探求してみたい。

本稿で取り上げるのは、山形県の北部、鳥海山の麓に位置する遊佐町に伝わるヤサラの人形である。ヤサラとは人形に託して悪病や災厄の退散を願い村内安全を祈願する行事で、かつては各町内や字ごとで行われていたが、現在では、平津、樽川、中山の3地区に残るだけとなった。以下ではヤサラを概観して、多様な現れを考察するとともに、ヤサラ以外の人形の民俗とのつながりも考えて、人形が表象する空間について検討することにした。

3. 遊佐町平津のヤサラ

(1) 概要

ヤサラを今も伝える集落の一つは平津であり、行事名には「弥皿」という漢字を充てている。平津は昔は遊佐郷平都邑に属していた。現在は小原田^{おはらだ}、平津、平津新田、大楯の四集落から構成され、西側は長橋に接する。平津の戸数は43である。平津の有力者としては、斎藤家、今野家、榊原家の各本家があり、特に斎藤本家は、元の大組頭で、オヤカタサマ（お館様）と呼ばれ、斎藤イトウ（同族団）の本家として大きな勢力を持っていた。「大組頭」とは、江戸時代に庄内の最上川北三郡のみに置かれた職制で、「組」（村々を統合する行政単位）の内の肝煎の上にあって、大庄屋のもとで農村をまとめる役とされ、近世の農民としては最上層を占めた。斎藤本家は明治になって斎藤莊吾氏が明治22年(1889)に蕨岡の初代村長になったが、子孫は北海道に移住し（現在は千葉県在住）、居住していた民家（元禄16年・1703建造）は、榊原家の屋敷（榊原藤吉家）として平成8年(1994)まで使用されてきた。その後、老朽化により居住が難しくなったために、遊佐町の管理下に入り、杉沢に移築して、現在では「語りべの館」として活用されている。斎藤家の分家は上長橋に居住しており、そこには位牌を祀る仏壇もあるという。一方、今野家は、本家の当主は代々今野甚左衛門を名乗り、村で最も古い家とされて、先祖は平津の楯主であった殿塚弾正に遡ると伝えられる。大楯からは平安時代にまで遡る遺品や遺構が発掘されており、中世期の荘園の有力者の中心地であったと推定されるが、中世との連続性は明らかではない。寛政年間には今野一族から大組頭を出したという記録が残る。殿塚弾正の屋敷は元々は楯の跡で、現在の今野猛氏宅がこれにあたるといふ。現在では七戸の分家がある。次に榊原本家に関しては、当主は代々榊原藤右衛門を名乗り、富豪として知られ、七戸の分家がある。現在の平津の住民には伊藤姓と今野姓が

多く、榊原が六軒、斎藤が二軒あるという。村の脇を流れるやっめ川は灌漑用水を供給したが、ヤサラの人形を送り出す川でもあった。元は「荒川」とも言い、下流域は洪水でよく決壊し、村人は親しみと畏れを抱いていた。一方、通常は流路として重要で、米を積んだ船が下るなど、藩のお蔵米船の重要な通路でもあったらしい。村は川を介して町場とつながっていたのである。

(2) 神社と寺院

平津の鎮守は、皇大神社（大字小原田平岡 23）である。祭日はヤサラ（弥皿）が4月4日、大祭は5月1日で、その他には元旦祭と新嘗祭を行う。由緒は、平津楯（平津館）に居館した殿塚弾正（城主）が応神天皇を祀って八幡神社を創建したのが始まりで、その後、境内地に諏訪神社を建てて、明治初年（1868）に合祀して天照大神を祀り、皇大神社として鎮座した。境内の西側に出羽三山碑（羽黒山・月山・湯殿山。文政八年乙酉七月吉辰 施主榊原藤原右衛門 惣村中）が建ち、東側には鳥海山碑（天保六乙未年六月建之。基壇は平成14年修復）があって、江戸時代に盛んであった山岳信仰を支えていた講の隆盛が偲ばれる。脇に庚申碑があり、家ごとに回りもちで庚申を祀っていた。平成16年（2004）現在の宮司は、鳥海尚覺氏、禰宜は塩谷弘憲氏、責任役員（氏子総代）は、今野猛氏、今野理作氏、伊藤慶太氏が務めていた。

寺院としては都興山帝立寺（曹洞宗）が平津山麓にある。岩手県の黒石にある曹洞宗の名刹、正法寺の末寺とされ、開基は帝立太子という南朝の貴族で、嘉吉元年（1441）正月五日創建とされる。史実かどうかは確証はできないし、この年の干支は辛酉（かのとり）で、暦の上では大きな出来事が起こる年とされるので、後世の作為かもしれない。年間の行事としては、旧5月5日菖蒲たたき（現在は6月4日）、旧7月23日帝立寺地藏祭り（現在は8月23日。戦没者慰霊）、8月15日施餓鬼が行われる。現在は庄内三十三観音霊場の一つであり、梅花講が参拝に来て御詠歌を朗

誦する（次の霊場は玉川の玉泉寺）。住職は小松義道氏で、晋山式は平成8年(1996)10月27日に行われた。建物は平成13年10月吉日に再建された。境内には庄内おぼこ発祥の地の碑（おぼこの「梢」は榊原三郎兵衛の娘）が建ち、下手には白山神社がある。

地元の伝説によれば、開基とされる帝立太子は南朝の貴族の落人で、大楯を根拠地に飽海郡一円を支配していた遊佐氏の招きで平津に来て仏教寺院を造営したと伝えられ、平津楯主であった殿塚弾正の庇護を得て隠れ住んだとされる。現在でも本寺の大檀那は弾正の子孫とされる今野家である。『帝立寺年代記』によれば、大楯には帝立太子の殿舎の跡があったという〔遊佐郷村落誌「上」1979:183. 以下「上」と略す〕。伝説によれば、中央で内乱が起こり中央から帝立太子に迎えが来た。その時、「年ふれば こことも雲井の 遊佐の浦 住めば平らの 都なりけり」と和歌を詠んで、迎えの人を帰した。当時、太子が兜に入れて持って来た一寸七分の仏を守り本尊としていたが、現在も寺に安置され、「村仏」と呼ばれて拝まれている。本殿の向かって左側に厨子があり、右手に村仏、左手に観音、右手手前に「太子位牌」、左手手前に「弾正位牌」を祀る。寺号を「都興山」というのは、「都を興し、ミカドを立てる意味」が籠められているのだという。帝立太子という人物名もこの伝承に由来すると考えられ、史実ではない可能性が高い。但し、伝説には「貴種流離譚」の性格があり、民衆が伝承してきたことの意義は大きい。太子の墓とされる塚が大楯村の田圃にあって、五輪塚や太子塚と呼ばれ、昔は帝立寺から真直ぐの道が通じていたという。現在は小祠があり、石像三体を祀る。

大楯村は、オオタテ（御館）の意味で、昔の楯跡とされ、発掘の結果、平安時代の荘園の中心地であったことが推定され、現在も首塚、鉾塚、五所の馬場（御所の馬場）などと伝えられる旧跡が点在する。諏訪神社（螺^{にしん}辛堂）があって旧暦8月26日が祭日で、三日月が最も欠けそうな時に二本の蠟燭を立てて拝む。蠟燭が燃えている様がかげろうのように見え

るという。神仏混淆で、諏訪神だけでなく、釈迦・大日・聖観音の三体を祀り、南北朝時代の作だとされる。薬師十二神将も祀り、子供が川に入れたり、捨てたりして遊んだ。平津には、帝立寺の西側に館跡、平津山上に馬場跡（馬の金製の口輪が埋まっているという）、弾正屋敷跡（今野猛氏宅）、御前井戸、郎党場、舟着桜、若宮様、お蔵屋敷（皇大神社の北隅）などの旧跡があり、史蹟の意味付けが強く見られる。平津山（西山）には陣屋楯屋跡があり（字中山）、高さ 1m 余、長さ 100 m の土塁が残り、時代は南北朝とされ[「上」: 25]、大きな勢力を持つ者がいたと推定される。杉沢の村の東南の丘陵の一番高い所は「楯沢^{たてそ}」といい、この沢水を殿様が飲んだと伝えられ、村人は楯の跡かという。対岸にばんば岩、別称「姥捨山」があり、伝承に富む。

(3) ヤサラー平成 16 年の状況

①若連中

平成 16 年(2004)の行事の状況を記しておくことにしたい。行事の主たる担い手は、若連中（ワカレンチュウ）で、古くは若勢（ワカゼ）と呼ばれた。本来は 8 歳から 12, 13 歳までであったが、学校教育の展開に伴い、学齢では小学校 6 年から高校 1, 2 年までで 17～18 歳が上限とされ、参加資格は「未婚者」を条件とした。しかし、昭和 58 年(1983)に保存会（会長は区長が兼任）ができて以降は、既婚者にまで範囲が広がり、小学校 6 年から高校生までだけでなく、上限も 40 歳になった。平成 16 年は最も若い者でも 19 歳となっており、最年長は 45 歳と更に上限を上げて、若手が急速に減少している。別の人の説明では、正確には、子供組は 7 歳から 15・16 歳までで、その上の未婚者を若連中というと言く人もいた。本来は担い手は若連中で青年の未婚者に限定していたのが、人口の減少に伴い年齢の低い者を含めるようになり、最近では若手全体が減少したので、年齢の上限を上げたという変化があったようだ。若連中がヤサラーを行う時の装束は、かつては草鞋ばき、鉢巻、半纏、バンドリ、六尺ふ

んどしをつけていたという。若連中は、芳坂の大松の下の溜場によく集まっていた。人形の形成には不可視の若者の力と社会的規制の関与があった。

②準備

午前8時から9時にかけて、氏子総代3人が43の各戸を回り、藁を一戸あたり4把集める。かつては一户につき藁6把あて、総計約240把を集めた。午前9時頃に皇大神社、通称ウブスナサマに集まる。若連中が長老の指導を受けながら、藁を編み心棒の木にゆわいて高さ1・5m程度の藁人形を作る(写真1)。人形は平成12年(2000)頃から小さくなってしまった。それ以前は巨大で高さ4m程度、重さ120～130kgあった。昔の骨組みは神社に保存されており、生木を使用して長さは380cmであった。大きな藁人形を酒に酔っ払ってムラの中をかつぐので、とても危なかったという。段々と担ぎ手が少なくなってしまったので、人形を小さいものに作り変えることにした、ということであった。大→中→小と段階的に変化したらしい。現在は昔の半分以下になっているので、一日がかりで作っていたのが、半日で終るようになった。藁は従来は手で刈って準備しておいたが、品種改良で丈が短くなって、人形作りは難しくなった。現在はコンバインで刈る。丸太3本を骨(心棒)にして藁を積み重ねる。頭・手・脚を作り、乳首・臍・男根・陰毛(杉葉)を付ける。形状は裸の男性をかたどり、陰部を露出する形である。人形には、右から、「村中安全」「家内安全」「五穀豊穡」「交通安全」と書いて(交通安全は新しい祈願)、現在ではお守りもつけるようになった。12時頃に完成し、公民館で集まって飲む。人形が大きい時は、草鞋作りも一日がかりで、これを履いて人形を担いだという。現在の準備作業は神社の境内と脇のビニールハウスで行っているが、元々は昔の公民館でやった。二階建てで、上が集会場、下が精米用の作業場で、下で縄ないや縄打ちをした。公民館で行う前は、三叉路でもみの木に立てかけて人形を作った。



写真1 平津のヤサラ

③神事

午後4時から神職による祭典を行う。昭和58年(1983)の区長の時に保存会を作って、それ以後は神職を呼んで神事を行うようになったという。衣装の半纏のお祓いと玉串奉奠を行う。平成16年の神事に際しての玉串奉奠の順序は以下のとおりであった(敬称略)。区長 佐藤弘, 氏子総代代表 伊藤孝太郎, 若連中頭 伊藤勝弘, 製作者代表 伊藤孝勇, 交通安全協会 伊藤武, 弥皿保存会代表 伊藤修一, 来賓代表 伊藤正夫(90歳)。神事終了後に、人形に一升瓶から酒をかける。その後、太鼓(かつては法螺貝)を午後5時前と午後7時前の2回鳴らして、合図とする。太鼓には「嘉永六年平津村中」と記されており、西暦では1853年で幕末期であり、記録に乏しいヤサラの歴史は少なくとも150年は遡る。現在の参加者は、お揃いの法被を着ているが、これは平成6年(1994)に農協にヤサラの行事の趣意書を届けて出したら、「弥皿」という文字を書いた法被をくれたので、使用しているという。午後6時頃に若連中は気

勢上げの酒杯を上げる。

④人形

夕方になると、境内に立ててある人形に、村人が藁ツトに御馳走を入れて持ってきて供物として縛り付ける。神社祭祀と結合する前は村中に立てたという。御馳走は大根づけ（沢庵）1本で、包丁の切れ目を入れて供える。若連中にも酒を振舞い、人形にもかける。これを「立ち酒」を飲むという。人形に参拝する人々が神社に集まってくる。午後6時50分頃に触れ太鼓がなる。これは会長か会計係の役目と決まっている。午後7時はいよいよ人形の「出初め」である。若連中の6～7人が人形を担いで、「ヤッサラー」と唱えて村中を回る。本来はヤサラに因み8人編成であった。村内で2カ所止まるところが決まっている。午後7時30分頃に村中央の四ツ辻に止まると、人形につけた大根づけ（沢庵）が人々に配られて、「祝い酒」が振舞われる。村で用意した分もこのときに振舞う。最後に、村境へと太鼓（昔は法螺貝）と鉦の音で下手へと送り出して田圃に放置し、午後8時過ぎには終了する。平成15年までは人形を燃やしていたが、平成16年から環境問題がやかましくなってゴミ処理の対応が厳しくなり、心棒の骨組を残して消防団が解体することになった。昭和45年（1970）頃までは八面川へ「厄送り」として送って流していたという。幅3mくらいの川があり、コウヤノハシ（高野橋）という橋まで担いでいて流したのだという（佐々木建築工務所の西100m）。川が護岸工事で整備されて細くなったので、人形を焼くことになった。平成16年から燃やさずにバラして終了している。人形の行方は、流す→焼く→解体する、と三転したことになる。しかし、人形を送ることを、「供養」と考える人もいて、燃やさないといけないと主張している。民衆の意識では流す、あるいは燃やすことで消滅することが望ましいと考えているようだ。八面川の由来は、やつめの多い川だからとか、字八ツ面（長橋村）を貫流するからだという[「上」: 53]。上長橋には八面山長泉寺があり、その傍らを流れ

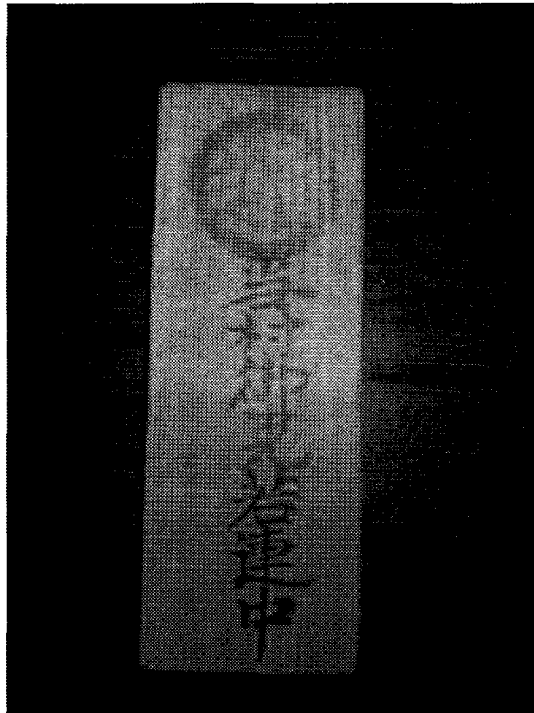


写真2 木札

るので八面川またはハツ目川と呼ぶという説もある[「上」: 188]. 最も可能性が高いのは、しばしば洪水を起こして、八方に流れる荒れ川になるので、八面川というとする説明である.

⑤直会その他

直会は午後8時から9時まで公民館で行う. かつては池田鉄蔵氏の家で行っていた. 座敷の正面に観音様(村の南の田中にあった観音様の杜から移動)を安置してお神酒, お供物を供えて, 灯明をつけておく. 若連中の頭(ムラガシラ)を座席の正面に据えて直会に移る. 平成16年の参加者は11人だが, 昔は二十数人いたという. この行事に参加すると, 一寸に三分の「○当村御免若連中」(○は天保通宝の一文銭)と書いた木札が与えられた(写真2). これによって部落の行事に参加できる資格が得られて, 山仕事, 道普請, 川普請, 祭礼, 雪降ろしなど村の仕事に出た. 戦時中に若連中がいなくなり一時的に中断した以外は継続している. ヤサラをやめようかという者もいるが, 悪いことが起こるといやなので, 続けて

いるという。祭りの費用は、部落会から5万円出して、2万円は若連中から、一戸あたりは1,000円を集めることで賄う。公民館での直会は、午後9時過ぎに終了して解散する。かつては延々と飲み会が続いたというが、現在は淡白である。ヤサラは、勇壮で荒っぽい行事であったが、現在は役目を果たせばよいというように変わってしまったという。郷土史家の菅原傳作はヤサラについて「八岐の大蛇にまつわるもので、村の災厄、病氣など一切このヤサラに負わせて村の外に払い、村の安全を祈る悪魔払いの行事である」[「上」: 51]と説明している。しかし、ヤサラは複合的で様々な要素を含みこんでいる。

(4) ヤサラのまとめ

平津のヤサラの特徴をいくつかまとめて示すと以下のような点を指摘できるであろう。第一に行事の目的は、病氣や災い事、悪いもの好ましくないものをヤサラの人形に背負わせて村の外に追いやり村の安全を祈願することである。明治・大正期の2回の大火事や昭和9年(1934)の冷害の記憶があり、こうした不幸が起こらないように願いをこめる。害虫発生の防止、家内安全も祈願する。太鼓(法螺貝)や鉦などの鳴り物で大きな音を立てて送り出すという意味もあるだろう。郷土史家の菅原傳作は「悪魔祓い」というが、地元の人言い方では「厄送り」である。行事が行われる夕方という時間は、昼と夜のあわいで、人形が送り出される方向は、下手の川であり、橋で投げ捨てたり、燃やしたりして、ムラの内部から外部へと送り出す。文字どおりの境界の祭祀である。人形の移動に伴って、意識される場は、辻、村境、橋、川といった境界の空間であり、人形の移動や設置は空間のあり方を表象する。祭日も元来は3月4日で、流し雛と重ね合わされていた。

第二に行事の由来については、ヤサラの名称を須佐之男尊(スサノヲノミコト)の八岐大蛇退治に見立てて説明している。藁で作った人形は蛇との結びつきがあり、大蛇退治伝説にちなんで、八つの頭を持ち、八つの酒

桶に頭を突っ込んで酒を飲んだことに由来してヤサラというのだとされる。人形送りは大蛇退治になぞらえて、人形も八人で担がれる。神話による権威付けが施されているが、この言説は幕末の国学による影響か、明治以降に生じた可能性が高い。神仏分離によって、ムラの鎮守を皇大神社とし、祭神を天照大神とするという国家神道による民間の神々の日本神話への読み替えによって、従来の荒ぶる川の水神が須佐之男尊に具象化されて、大蛇退治が説明として持ち出されたのではないだろうか。八岐大蛇退治伝説の背景として、村の脇を流れる八面川が洪水が多い荒れ川であり、その様相を蛇に見立て、更には藁人形と蛇を結び付けて水を鎮める意味があったのかもしれない。度々水害に見舞われて大きな被害を出してきたこの地域の人々が、災害を何とか食い止めたいという願いがヤサラに籠められたのであろう。元々、蛇と水は関係が深くて結合しやすい。八面川の由来は、暴れ川で八つの方向に動くことで名づけられたともいう。八は聖数にも、魔物の数にもなり、人形も蛇も両義性を帯びやすい。人形を八面川に流して鎮圧する行事がヤサラであったのではないか。ちなみに、近くの集落である鹿野沢では、旧6月7日に蛇祭りを行っている。

第三に社会的機能については、担い手の中核はかつては未婚の若者たちで、子供から大人への「加入儀礼」「成年式」(initiation, イニシエーション)の様相があり、地元の人の中にも、若連中(若勢)の「元服」にあたると説明する人がある。人形にはかつては水をかけてわざと重くしたといい、担いで大暴れした。これは若者への試練であった。祭りの間中続く、暴力性に満ちた荒々しい行為、酒の大盤振舞いも大人になる通過儀礼と考えれば納得がいく。かつては、ヤサラの行事に参加した結果として、若者たちは一人前として認められて村行事に参加可能になった。その証が、かつて部落会長から与えられていた「平津部落若連中」「当村御免若連中」と墨書した一寸三分の木札で、これによって認証を受け社会的な承認が与えられたのである。しかし、若者が減少し、その役割も希薄化するにつ

れ、行事はおとなしいものに変化し、担い手は役目をこなせばよいという意識になった。

第四はヤサラの人形の機能や意味であるが、当然のことながら信仰の対象である。人形は裸の男性の姿をかたどり、男根や陰毛をとりつける。造型に性的表現があり、陰部をかたどって露出して引き回すのは、悪霊を退散させる力の誇示であり、防衛機能を持つとみることもできよう。男根をかたどる造型は、悪いものをさえぎる、魔物を祓うなど、賽の神とのつながりの強さを示すのであり、道祖神との連続性を考えることはやや強すぎるが、類似点はある。一方、農業に関わると考えれば、稲作の豊作祈願が意図され、村人の子授けの願いにも向けられる。現代では、人形に書きつけられた祈願文の願いである「村中安全、家内安全、五穀豊穰、交通安全」に見られるように一般の祈願になっている。人形は、ムラの守護神に変化しているが、最後は村境に送られて流された（焼却された）ように厄をつけて追放することで「厄送り」の機能も帯びる。解釈は一つに収斂しない。また、人形の神聖視も認められる。大人形の巨大さは、異常なものの表象であり、特別な力を持つと認識される。人形造りには男性のみが参加し、担ぐのも男性に限定される。不幸があると死穢のために参加できないという禁忌があるのは、神聖視に由来するのであろう。

第五は行事の神事化と変化である。ヤサラは本来は村人が協力しあって行う行事で、神社の神事ではなかったのが、保存会が昭和 58 年にできてから神官が来るようになったという。制度化によって、変化が生じて神事として管理されるようになり、村や集落が主体となる民間の年中行事が、神社の制度や祭祀に組み込まれた。祭日は雛祭り（3 月 3 日）の翌日の流し雛にあたり、災厄を託して流す意味がある。祭日は、伝承では旧暦 3 月 4 日→新暦 4 月 4 日→4 月第一日曜日（アンケートで変更、平成元年頃）→4 月第一土曜日（平成 15 年以降）と変わってきた。徐々に祭日の意味が喪失し、固定した日付から日曜日、更には休みをゆっくり過ごした

いという気持から土曜日へと変更されて移動祝祭日となった。また、偶然にも、新暦の月遅れで、4月4日になった時には、四の数字に「死」の連想が働き、悪しきものや穢れとみなされるものを人形につけて追いやるという「流し雛」の行事と再結合して、機能が強化された可能性もある。

4. 遊佐町樽川のヤサラ

(1) 概要

戸数17戸の集落で、菅原姓10戸からなる(2004年現在)。地区で言えば、旧直世^{すぐせ}村の樽川である。歴史は、菅原弥右衛門が新田を開発して村を作ったと伝えられ、初代の源兵衛和興の没年が大永7年(1527)であるから、400年の歴史があるという[「上」: 242]。この村は、明治初年にすべて神道に変わり、葬式も神葬祭である。神社は皇大神社で、天照皇大御大神(大日靈貴神^{おおひるめむち})と豊受姫大神を祀る。境内には小祠が三つあり、そのうちの一つは山神社で、男根状の石を祀る。祭日は5月1日である。年間行事の中でもヤサラ、いわゆる八皿人形送りは、4月4日に行う。樽川はヤサラに八皿の漢字をあてる。なお、村には神代神楽(仙台から伝来したとされ仙台神楽ともいう)が伝えられ、不定期だが神社に奉納され出雲神話も演じられる。

(2) ヤサラー平成16年の状況

①準備

ヤサラは毎年4月4日に決まっていて日付を変えることはない²⁾。各戸が一体ずつ藁で30~40センチ大に人形を作る。青竹を胴に指す。一家の主が家を代表して作る(作ったら隠して置いておく)。但し、人形は仏滅の日には作らない。頭に鉢巻をして椿の花を挿す。これは簪で女性を表わすという。また椿は「凶の花」なので、凶事や不吉なものを送り出すのにかなうという意味もあるらしい。人形の手には御馳走を入れた藁ヅトを下げる。鉢巻は頭痛を防ぎ、腹巻は腹痛を押さえるとされ、人体との類比と

効用が語られる。前垂れを護身用につける。ヤサラの当日は、神棚の下に人形を置き八皿の膳に酒をそなえてもてなす。供える場所は、床の間の前に据える家、先祖を祀る仏壇前で祀る家もある。ヤサラとは、この時の供物の皿の数が八皿であることに因むという。御馳走は各家ごとに異なるが、旬のものを使う。例えば、①お頭付きのニシン、②赤飯、③天麩羅、④味噌汁（豆腐やきのこ入）、⑤刺身、⑥角天、⑦漬物、⑧お菓子、といった具合である（卵やすまし汁を供える家もある）。ニシンは春の魚の意味があり、この頃に上って来る旬の魚である。夕方になって、人形の出立の時間になると、家族全員が拝んでから、お膳に盛った八皿の御馳走を少しずつとって藁で編んだツトに詰めて、「弁当」として人形に背負わせる。これをおかずを背負うともいう。玄関先で酒を頭からかけて外に出る（写真3）。これを「立ち酒」を飲むと称する。重要なことは、一度外に出たら二度と再び内に戻ってはならないことである。



写真3 樽川のヤサラ

②人形送り

日暮れ時にあわせて、ほぼ午後6時頃に村の中央の辻、十字路風の場所に集まって（菅原源十郎家の屋敷の前）、区長が先導して出発する。人形を持つのは子供たちが主体である。但し、樽川には適齢期の子供が現在2～3人しかいないので、孫やイトコの子や他の部落からも動員して行事を継続している。若連中（若勢）の関与はない。人形を持った子供たちが、村中を通して太鼓・鉦・法螺で村下まで送っていく。子供たちはそれぞれに人形を持って「やさら人形送んぜ（送うのぜ）どこまで送んぜ、佐渡島まで送んぜ」の掛け声を上げ、太鼓をたたき、法螺を吹き、鉦をたたき、夕日の中を西方に向かって川沿いに歩く。鳥海山を背にしての人形送りである。村下の橋のたもとで、人形の基体の竹をとって洗沢川に流して村中の安全を祈る。災難や災厄に合わないよう、病気や不幸を人形が持ち去ってくれるように祈願して、家族の無事を願う。

樽川のヤサラは、魔除けと厄祓いの様相が強い。夕暮れの中、村はずれの川に村人が総出で向うのであり、辻や橋など境界地点が行動の焦点となり、村の外に送る。但し、人形には愛着をこめて遠い旅に送り出すという感覚があり、人形と人体を同一視して、身体の悪い部分を治してもらい願うもこめられる。どこことなく神送り風の感じで、基本的には子供のいる家が主体として行っていたので、健康祈願、成長祈願の意味がある。しかし、人形は、家の内から外へ、村の内から外へと、不可逆的に動き、後戻りは許されないとされるのは、人形に何かが託されていることの現れと言えよう。また、水害の脅威を防ぐ意図もあったかもしれない。洗沢川は底が浅い荒れ川で、アレゾともいい荒澤の転化かとされ、鳥海山から直接に一気に流れ下るために、しばしば氾濫して大きな被害をもたらした。もとは舂川の村中を流れていたが、中山樽川の両新田の開発が進むにつれ用水の必要から、両村境に移動したが、しだいに河床が高くなり洪水のたびに村は被害を蒙った。舂川の地名も荒沢が洪水の度に「水の増す川」であっ

たことに由来するのだという。洗沢川は水の恵みを齎すが、洪水にも見舞われるので、樽川や隣接する中山の各家は石築地^{ついに}（石垣）を築き水門を作り、夜の洪水に備えてガンドウを用意して洪水の被害を最小限に止めようとしていた[「上」：241]。村の地名の樽川の地名も「たき川」の意味で、大雨の時などに滝のように流れる水を意味する[「上」：31]、あるいは水の増す川の意味とも言われる。また、平津と同様に水と大蛇の結びつきの連想もある。ヤサラの由来は、「神代の昔、須佐之男尊が八岐の大蛇を退治した折の八つの酒桶になぞらえたもので、悪病災厄退散を祈る行事である」[「上」：244]とされる。八皿の意味を八岐大蛇退治伝説に仮託して語っており、明治期に日本神話の須佐之男尊の話を取り込んだ神社祭祀の再編の影響も加わっていると考えられる。但し、蛇と水との縁は深く、水を鎮める意味が基盤にあると思われる。蛇は人間にはどうすることもできない自然の力の象徴でもある。また、樽川の人形送りは夕暮れ時という化け物が出現するような時を選んで行われ、人形を椿という首がころりと落ちる「凶」の花で飾ること、4月4日という「死」の連想を伴う不吉な日を選ぶこと、旅に送り出すという意識が伴うことなど、人間に負性を与えるものを境界の場であるムラ境や川の外へ送ることで、ムラ内の禍々しいものを追放するという意味がある。4月4日という祭日については、元々は、旧暦3月3日の翌日の流し雛の日の行事であり、新暦に移行して不吉な日の色彩が強まったのかもしれない。しかし、現在でも土曜日や日曜日に移す気配がないことは、祭日の意味の重要度が高いことを示している。

(3) 中山のヤサラ

中山は、樽川に隣接した戸数29戸の集落で、ほぼ同じ内容の子供によるヤサラの行事が行われている。子供がいる家ごとに人形を作って夕方に外の道沿いに出しておく。樽川のように村の辻に人形を持って集まることはしない。子供組の5～10人が、家々を一軒ずつ回り、玄関先や通りの

脇に置いてある人形を一体ずつ取りつつ、「ヤッサラー」と言いながら行列を組んで、西方（川下）に向かう。村人の全員が参加するというよりも、代表者が各家の厄を取り集めて、送り出すという意識が強い。人形は最後は村境へと運んで田圃に立てて祈願して、「後を振り返らずに」戻って来る。音も立てないほうが望ましいという。元々は水に流したが、現在では火で焼くように変わった。当日は田圃に立てて置いて、翌朝に処理するようになっている。悪いものを置きざりにするという感覚で、人形を外に放置することと合わせて考えると、樽川に比べて厄祓いの様相が強く表れると言えよう。しかし、平津の人形ほどの強さはなく、大きさも小さいものである。禍禍しきものへの真摯な恐れが感じられる。置き去りにした後「後を振り返り向いてはいけない」と言われることが、この想いをよく表している。中山は、大字杉沢の字中山、中山口、大樽川から構成されているが、微妙な違いがあり、人形に怖れを託す意味合いが強い。人形を形代、つまりムラや個人の身代わりとして、災厄を移転させる機能へと特化する傾向がある。

5. 平津と樽川の比較

平津と樽川のヤサラを比較すると、いくつかの違いを指摘できる（表1）。平津の場合は、総じて「厄送り」の様相が濃く、悪病や害虫を除く、悪いものを送り出す人形送りである。しかし、男根を付けた大人形は村境におかれて、不幸・災害を防ぐ機能も秘めているようであり、防御機能を強調すればいわゆる「人形道祖神」の様相もある。人形は男性で一つだけ作り、単位は村自体で、担い手も、若連中で男性に限られ、村中を動いて境界地点に向かう移動が主体である。空間に注目すれば、ムラの中心から周辺へ、境界の意識化、内から外へという一方向の動きと、神を招き「村中安全」「家内安全」「五穀豊穰」「交通安全」を祈願して送るという送迎、病気や不幸を防御する大人形という外の不可視の力への対抗など多様性が

ある。変化の様相として、保存会成立して以後は、神社祭祀との結びつきができた。ヤサラの説明については、ヤを八という数字に結びつけて、八岐大蛇退治、8人の担ぎ手、八面川^{やっめ}に流すなど意味を数字に付加することで行事の性格をやや権威付けて示そうとするなど、明治の神仏分離以後の国家神道の言説が紛れ込んでいるのかもしれない。但し、八については「八平手」などに見られるように聖数と考えることもできるし、供物の皿の数を意味するとされるので、負の側面だけでは解釈できない。一方、変化については、ヤサラの祭日を時代の変遷に合わせて、週末の土曜日や日曜日に変えるなど柔軟に対応してきた経緯がある。農業主体の暮らしが変化し、担い手の若連中が会社勤めなど常勤の職につくようになり、少子化の影響も大きい。元来、平津は社会的な背景として、歴史的にも政治の中心地で、有力者の大組頭を輩出しただけでなく、旧楯主とされる殿塚弾正の子孫が居住し、広い田畑を持つ富農もいるなど、貧富の差が大きい階層制の社会を形成していた。流路を通じて町場との交易が盛んで、経済的にも豊かであった。平津では、政治や経済に関係する権力作用がヤサラにも大きな影響を与えていたのではないだろうか。平津のヤサラに、若連中のイニシェーションとしての様相が顕著に見られたのは、階層秩序維持のための社会基盤形成の意図がヤサラにはこめられていたと思われる。

一方、樽川のヤサラは祭日を4月4日に固定して変えないのであり、信仰の強固さを表しているが、人形に対しては両義性が付与されている。行事には、「流し雛」の様相があり、子供の健康祈願や病氣直しを願い、「厄祓い」をするだけでなく、供物をつけて神霊を送る神送りの様相が強いが、凶の花の椿を人形につけるなど歓待と同時に忌避の様相もある。人形にお土産をもたせて「旅」に出すという意識は、人形を完全な悪や負の象徴としていないことの現れであろう。行く先も佐渡島という具体性を帯びた地名が語られ、遠い海の向こうの島に送るという意識も見られる。背後に聳える鳥海山と歴史的に深い関係を持つ飛島が言及されないのは、

「近い島」ではなく「遠い島」に送ると考えられているからかもしれない。但し、サドとは堰や小川を意味する方言でもあり、村はずれの境界を意味する地名の可能性もある。富岡では村の上に「上のさど」、下に「下のさど」があり[「上」:207]、この見解を採用すれば、単なるムラ外れの意味になる。また、人形は女性であり、椿を簪として可憐さが伴う。平津の人形が裸体で野生味あふれるのとは異なり、家ごとに祀られる雛人形とのつながりが意識される。人形は各家で一つずつ作るという平等性が維持され、家々の独立性と共同性の微妙な均衡のもとに行事を行う。保存会もなく、神社祭祀とは結びつかず、参加者も男女を問わない。つまり権威付けを求めないということである。八という数字については、家の中で上げる八皿の供物が強調される。洗沢川と大蛇の連想もあるが、大蛇退治の伝承はさほど強調されない。社会的背景としては、農村の生活が維持され、菅原姓が半分以上を占めて安定性が強く、有力者も富農もいない中で、相互の平等性の下にヤサラが形成され、権力の作用は弱いと見られる。

平津と樽川の双方のヤサラに共通する点は、空間の表象としては、「内から外へ」「川下に流す」「西方へ」という動き、場所としての「村境」「辻」「橋」という境界を焦点化すること、動きとしては一方向というよりは双方向、あるいは多様な流れがある。また、時間としては「夕方」という昼と夜の境界の時間である。基盤には農耕の基本となる水を確保して豊作を祈願するという生活の安定への願いがあるが、しばしば洪水を起こす川への畏れもあった。仮説としてしか提示できないが、ヤサラの語源とは何かというと、ヤクをサラウ（浚う）という意味ではないだろうか。あるいはヤクをサル（去る）かもしれない。平津と樽川のヤサラは、魔除や厄祓をするという観念を基盤として、多くの文化・社会要因を接合して形成されてきたのであろう。そして、双方に外部から影響を与えたのは、庄内や村山を中心とする雛人形文化圏（酒田、鶴岡、村山地方など）とでも呼ぶべきものの存在で[藤田 2000]、江戸時代に北前船を通じて、京・

表1 平津と樽川のヤサラの違い

	作る数	担い手	人形	目的と特徴	祭祀形態	性別	祭日	共通
平津 (弥皿)	集落で 一つ	若連中 男性	大	悪病, 害虫を除く. 若者の加入儀礼	神社祭祀 との結合	男性	移動	魔除 厄祓
樽川 (八皿)	各家で 一つ	子供 男女	小	神霊を送る. 佐渡島への旅. 子供の健康祈願	家と村の 行事	女性	固定	魔除 厄祓

大阪という関西の都の文化と直結し、都の人形も運ばれてきていた。特に富豪層の間に雛人形の習俗は急速に定着したと思われる。このように、ヤサラという民俗行事は、外部の文化や、権力者の慣行の影響を受け、歴史的変遷や受容する側の社会的条件によって変貌しつつ、創造的に人形の民俗を作り上げてきたのだと言える。そして、ヤサラは雛人形送りと厄祓いを混ぜ合わせ、旧暦3月、現行では4月という農耕の始りに先立つ「春祭り」として地域に定着して、個性的な行事になったのである。平津と樽川のヤサラの違いを中心にまとめてみた(表1)。

6. 各地のヤサラ

遊佐の各地で行われていたが、現在では消滅してしまったヤサラについての報告が『遊佐郷村落誌』「上」「下」に載っている。いずれも断片的であるが、現行のヤサラとの共通性や地域ごとの差異があることがわかるので、再録しておきたい。

平津新田の場合、「大正年代にはヤサラが盛大に行われた。若勢たちが三上神社で七～八尺の大藁人形を作り、腹に大石をいれ、今の半鐘台のところに立てた。村中御馳走を藁つとに入れて『やさら』に捧げた。夕方に太鼓や鉦をうちならしながら、重い『やさら』を背負い、重さで潰れる者もあるので、みんな大喜びで八面川まで送り、川に流して村の災厄を祓った賑やかな行事であった」[「上」: 53]という。箕輪・落伏^{おちふし}の場合、「旧

三月四日、小さな藁人形に椿の花を頭に挿し、するめを持たせ、八杯の酒を飲ませて『ドンケンドンケン』と太鼓と鉦をたたき『やさら人形送ろうぜ』とこどもたちははね廻りながら村端れの田圃の土手に指したものである。戦後は絶えてしまった」[「下」: 196]。箕輪では大きい人形を作って焼き、鮭川に流したという説もある。下当の場合、「三月四日夕方から藁で作った大人形の腹に石を入れて、男根を作りいぐさをつけて陰毛にみたて頭には椿の簪をさした。皇大神社にすえて村人たちが餅を藁苞に入れて人形の手にさげて疫病退散を祈った。参拝がすむと初若勢がそれをつかぎ太鼓を叩きながら村を廻り、升川道の墓地附近で焼いた。餅は貧しい家庭にあげた。戦中にこの行事も絶えてしまった」[「上」: 236]。近くの北目でも行われていたという。長橋の場合、大正年間にやめたが、「若勢たちが大人位の藁人形を二つ作り、八幡神社と三上神社に立てた。顔をかき、男根をつけ、弓矢を持たせた。その後『やさらやりゆこう』と言って、番小屋から遊佐町に出かけて飲んだという。稲番人形と似ている」[「上」: 54]。服部興屋の場合、「四月に入って最初に雨の降った日に、ヤサラといって藁人形を作り、お菓子や餅など人形に抱かせて、皇太神社に奉納し（菓子のない頃は干しイモ“サツマイモ”などが主体であった）子供達は太鼓をたたき、裸になって、村中で納めた藁人形を海に流しに行く。海から帰ると、人形に抱かせてあった菓子などを皆で分けて食べ、初春の子供の行事として楽しみの一つであったが、昭和の中頃になって、いつの間にか中止して今ではヤサラ太鼓の打ち方もわからなくなった。」[加藤 1982:48]。別の報告もある。「四月初めの雨の日に男の子たちが各戸で藁人形を作る。総長子供たちが太鼓をたたき、やさらのあることをつげ歩きする。太鼓の音は「人形坊、おこり坊」と聞こえるので、やさらのあることが分る。人形は一尺三寸、手、足をつけ棒をさして腹のところに干いも（今は菓子）などを包んでたばねる。子供たちは裸になって海に入り、やさらを海に流す。裸になったこどもたちの着物を高等科生たちが隠す。大

騒ぎして着物を探す。終って船玉神社に集って、干いも、干もちを食べる。今はもうやめてしまった」[「下」: 99].

これらの報告から、祭日は三月から四月（箕輪・落伏、下当、服部興屋）、人形を重くする（平津新田）、椿の花をつける（箕輪・落伏、下当）、神社に立てる（長橋）、若勢の行事（平津新田、長橋、下当）、子供の行事（服部興屋）、男根をつける（下当、長橋）、人形をヤサラという（平津新田）、稲番人形と似る（長橋）、川に流す（平津新田、箕輪）、村端れに送る（箕輪・落伏、下当）、海に送る（服部興屋）などの要素は、現行のヤサラとの共通性であるが、組み合わせや意味づけが異なり各地の個性もある。総じて、人形を担いで村を巡り、最後に送り・流すのであり、厄祓いの様相が強いが、神送りの要素も大きい。

7. 人形を作る行事と厄祓い

(1) 天王祭の人形と稲番人形

遊佐ではヤサラと同様に人形を作って祀る行事に天王祭（牛頭天王の祭り）があり、夏の初めの7月（旧6月）に行われていた。西遊佐の夏の祇園祭として、上藤崎では鎮守の稲荷神社に合祀されている八坂神社（在下出尻）を胡瓜天王といい、神のカタチを人形にして祀った。元は二尺くらいの藁人形で着物を着て鑿と才槌を腰につけていたという。現在では三川の彫刻師たちが作った木像に変わっている。7月15日（元は旧6月15日）に男の子たちが胡瓜天王を背負って、各戸を「天王様おいで」と呼ばわりながら廻り、胡瓜をあげて賽銭をもらう。胡瓜天王にあげないうちは、胡瓜は食べないという慣習であったという[「下」: 117]。服部興屋では、7月14・15日（元は旧6月14・15日）は八坂神社で胡瓜天王の祭りを行う。この時には藁人形を作り、胡瓜を抱かせて祀る。現在は一尺五寸の木像を木箱に納めている。14日は村人が藁づとに胡瓜を二本入れて胡瓜天王にあげ、別の家で上げた胡瓜を頂いてくる。15日には、藁づ

とに餅を入れて胡瓜天王にあげ、別の家のあげた餅を頂いてくる。子供たちは灯籠に胡瓜の絵を描いてあげる。夜は兄会の人たちが、天王様の御像を背負い、子供達が自製の灯籠にローソクをともして長い柄をつけて持ち、天王様の後に続いて神社の大きい太鼓を打ち、「ホーホー」と大きな声で触れながら村中を隅々迄回り歩く。天王様（須佐之男命）を奉じて、悪病など追払う行事ではないかと言われている[「下」：100]。神祭りであるが、天王は疫病神であり、流され、送られることが重要であったから、ヤサラ人形との共通性を残す。人形は神祭りの対象であるとともに、悪いものを託す形象にもなっている。あるいは、人々から託された災厄の塊は、強大な威力の塊へ転化し、悪霊・悪病を統合する神格になる場合もあると言える。

一方、稲番人形の習俗も伝えられ、8月から9月にかけての稲の収穫期に行われていた。藁で稲番人形を作って建てておき、稲を盗まれないようにする習俗で、大内野目では、8月下旬、稲刈の前に刈乾した稲が盗まれないようにと若者たちが村はずれに番小屋を建て、交代に夜番をした。その近くに、五尺くらいの藁人形（稲番人形）を立てた。右手に槍、左手に盗人を縛る縄を持った威風堂々たる姿であったという。元は高道という農道の傍に立てた。小屋は毎晩若者達で賑わった。9月末には、藁人形送りをする。稲の取入れがすんだ頃、ご苦労をかけた藁人形に酒やスルメを御馳走し、一番若い者が人形をおんぶして、これに大勢の若勢たちが随伴して太鼓で内川の橋まで送り、川に流した。賑やかな行事であったという[「上」：77]。下野沢では9月1日になると若勢たちが等身大の藁人形を作り、腹は穴俵六枚で揃え、手には槍と捕縄を持たせ、神社の門柱にもたせかけ、稲場の終るまで盗難のないように祈ったものだという。稲番小屋を作り、若勢たちが稲刈から稲場の終るまで毎晩番をした[「上」：143]。仙北新田（増穂）では、秋になると村の上下に男女二体（五尺位）の藁人形を作り、竹槍を持たせ、稲番をさせた[「下」：51]。上江地では、秋の

稲の稔る頃に村の東端に番小屋を建て、大きな藁人形を作り、お宮の御幣柱にたばね、稲番をした。稲盗人への対抗策であった[「下」: 60]。稲番人形は、盗人に対する防御や警護の役割を果たす守護神的な機能を持っており、人形に特別な力を認めることでもある。ヤサラの大人形と類似する機能もあり、人形のプラスの側面を強く出しているといえる。

(2) 菖蒲叩きと虫送り

人形は作らないが、村の外に悪いものを送り出すという行事として広く行われていたのが菖蒲叩きである。五月節句に行われ、菖蒲の強い臭いや切れ味鋭い葉が、魔物を追い払うと考えられていた。平津では、子供たちが菖蒲を持って各戸を巡ってお祓いをする。元は「五月五日菖蒲たたき」と唱えたが、祭日が変化したので「六月四日菖蒲たたき」と唱えて各戸を廻り、菓子などをもらい、叩き終えて八面川に流す[「上」: 52]。平津新田では、子供達が各々菖蒲叩きを作って各戸を廻り、庭で「五月の節句、菖蒲たたき」と唱えながら大いに叩き、お菓子などをもらって叩きながら歩く勇ましい行事であった[「上」: 189]。小松では5月5日に神社（上小松は熊野神社、下小松は日枝神社）で菖蒲叩きを行っていたが、各戸を「菖蒲たたき、まがんぜ」と唱えながら廻り祝儀を頂く[「上」: 57]。山内野目では、5月5日の端午の節句に、笹巻を神に供え軒端に菖蒲をさして菖蒲湯に入る[「上」: 76]。六日町では、5月5日に青笹で粽をつくり、軒に菖蒲と蓬をはさみ、休業して祝う。菖蒲酒を飲み、菖蒲たたきを行う[「上」: 163]。服部興屋では、5月5日に菖蒲叩きがあり、菖蒲とヨモギを縄でグルグル巻きに縛り、子供等が「祝いの菖蒲」と呼びながらボロボロになる迄地面に叩きつけ、叩いた音の高さなどを自慢しあった。ボロボロになった菖蒲の束は部落内の大きい樗などの枝に投げかけて置く。家の入口、倉小屋など建物の入口に、ヨモギと菖蒲を挿して悪魔除けとし、夜は菖蒲湯に入り健康を祈った。良い運動でもあり楽しみの一つであったという。

村にとって好ましくないものを外に送り出す習俗としては虫送りが代表的で、田圃に群がる虫の害を防ぐために、5月から6月頃には虫送りが行なわれた。稲作を営む農民にとっては害虫の被害が切実であったからである。大字大蔵岡（平と大淵）では、子供の行事になっていて、大竹に梵天をつけて、太鼓と鉦で「虫送りや、ドンケンドンケン」と囃して村中を廻り、田のかしらに梵天を立て、梵天紙の落ちるまで水をかける。虫が落ちるようにという呪いであるという[「上」：43]。小松でも、子供たちの行事で、六尺位の青竹に梵天をつけ、鉦をたたいて境堰（日向川の一口から^{にっこう}の水と鹿野沢からの水が一緒になる）に送った。梵天の下端を堰に流し、田の頭に立てた[「上」：57]。石辻でも虫送りがあった。大内野目では、五月中旬に鍬頭が神社に寄り、祈願祭を行い、梵天を持ち、太鼓や鉦を叩き、川辺まで行列していった。青竹に梵天をさし、鉦と太鼓で樋の口の川まで送った。「稲虫送ろうや、お山の陰まで送ろうや、どんどんけんけん」と囃しながら山の反対の方向に送った。梵天の先に水をつけ、それに砂をつけて持ち帰り、田の頭に立てた[「上」：81]。八日町では、昭和10年代までは、どこの村でも夏の虫時には虫送りをした。その日は皆休みで、太鼓と鉦を鳴らし虫札をもって村境まで送った。中央公民館の南西に八面川の虫送橋があって、八日町、十日町、下長橋の虫送りがみんな一緒になって押し負けると虫が来るといって、お互いに若勢たちが押しあって送ったものである。喧嘩祭であった[「上」：180]。千本柳では、梵天を持って太鼓や笛をならして「二又」まで送った。梵天は堰に流し、田のかしらに立て虫害のないことを祈った。烏崎では、6月になると、大人も子供も出て虫送りをやった。子供たちが太鼓と鉦をたたき、虫がいると太鼓の上にあげ酒をかけ、太鼓をたたいて退治した[「下」：208]。仙北新田（増穂）では、夏に虫送りをした。梵天をきざんで長い竿につけ、若者たちが各々の田に立て、その日は休んで虫害の無いことを祈った[「下」：51]。虫送りとは異なるが、悪病送りも行われた。大楯では7月に行っ

た。下江地では初秋の頃に若勢たちが藁でなでを作り、それに八つ手の葉を挿し、村の外れに立て、悪病が村に入らないように願った。この日は皆休みであった[「下」: 61]。夏という疫病のはやる時期に、虫送りや悪病送りをすることは当然であり、常に村の外に送り出すことが意識されていた。人形は作らないが、不可視の災い・祟りなすものを村の外に出すという願いは、ヤサラと共通している。

8. おわりに

ヤサラの行事には、人形をめぐる様々な意味が凝結しているが、春の祭りの性格があり、農耕の開始にあたっての魔除けや厄祓いが、雛人形送りと結びついて、地域の個性が刻印されている。担い手は家や村、若連中(若勢)など村ごとに様々であり、一部には若者のイニシエーションの意味合いがある。人形は一部では神社祭祀と結びつき、神祭りの様相を帯びるが、村人主体が元来のあり方のようなものである。こうした行事は、定期的に繰り返し行うことで、人々の祈願の達成が望まれる。いずれにせよ、自然の循環に合わせた年中行事のサイクルの中で、特定の時期に目に見えないものを可視化し、様々な意味を付与して、願いを託す。人形は善と悪の両義性を帯び、時にカミであるよりも荒ぶるモノと観念され、行事自体も暴力性を帯びる場合がある。野生を喚起させる媒体となるとでも言えようか。

人形を作り・祀り・流すことは何を目的とするかについては、男根をかたどる形状をつけることは男女和合や豊作祈願だけでなく、その力で魔物を退散させる意味もあり、疫病や悪霊への防御という考え方もあるだろう。他方、山の神の御神体は男根が多く、村境に疫神悪霊の侵入を防ぐ賽の神(道祖神)を祀ること[「上」: 204]があり、山の神や道祖神との習合が全くないとは言えない。富岡の道祖神社のように豪壮な男根を祀り、「うぶすなさま」と呼ばれる賽の神や、白木のように石造や木造の男根を

多く祀る所もあり、いずれも五穀豊穡や子授けの願いがこめられる。道祖神は子供や若者を担い手にすることが多く、小正月のドンド焼にも男根は出る[「下」: 93]。しかし、ヤサラについては、道祖神との関連性は薄く、道祖神は正月行事に祀られるのに対し、ヤサラは供物や龍蛇との関連で説明され、3月の流し雛とのつながりを色濃く持つ点で根本的に異なる。現在でも平津や樽川などという鳥海山から流れ下る川筋で多く行われていることから見れば、水との繋がり、特にその脅威への対抗の意識が託されていることは予想される。

したがって、ヤサラの人形を「人形道祖神」の中を含めることは難しい。神野善治によれば、人形道祖神とは、①疫病などの災厄が村に入るのを防ぐ目的で、②村人が力を結集して作り、③村境の路傍や、村内の字ごとの境や道の辻などに立て、④一年中据え置かれる、⑤大きな人形[神野 1996: 54]で、「境の神」としての性格をもって信仰されている人形[神野 1996: 267]とされる。その特徴は、疫病などを含む「災厄一般の侵入を防ぐ『境の神』」「避疫・防災の信仰を担った人形の神」で、これを基盤に「村内安全や五穀豊穡の神」となるとされ、地域の共同祈願が特徴であるが、家単位もあり「防御機能」が主体で、「追放され」「放置された」人形ではないとする。遊佐の場合は、大人形の性格はかなり一致するが、現行と廃絶も含めて、大人形を作るのは平津、箕輪、下当、長橋で、樽川、中山、落伏、服部興屋では小さい人形を作っており、悪い病気や諸々の災厄を祓う機能はあるが、それがすべてではない。ヤサラに見られる観念や実践は、天王祭の人形(6~7月)と稲番人形(9~10月)と共通要素があり、菖蒲叩き(5月)と虫送り(5~6月)という悪霊を村の外に送り出す行事とも連続性を持っており、比較の観点が不可欠である。そのためには、人形の民俗に関する一般理論が必要かもしれない。

ヤサラを構成する基本要素は、実践としてのコト(呼称、信仰行事)と形象としてのモノ(形態、素材)である。その根源の形態は現世に生きる

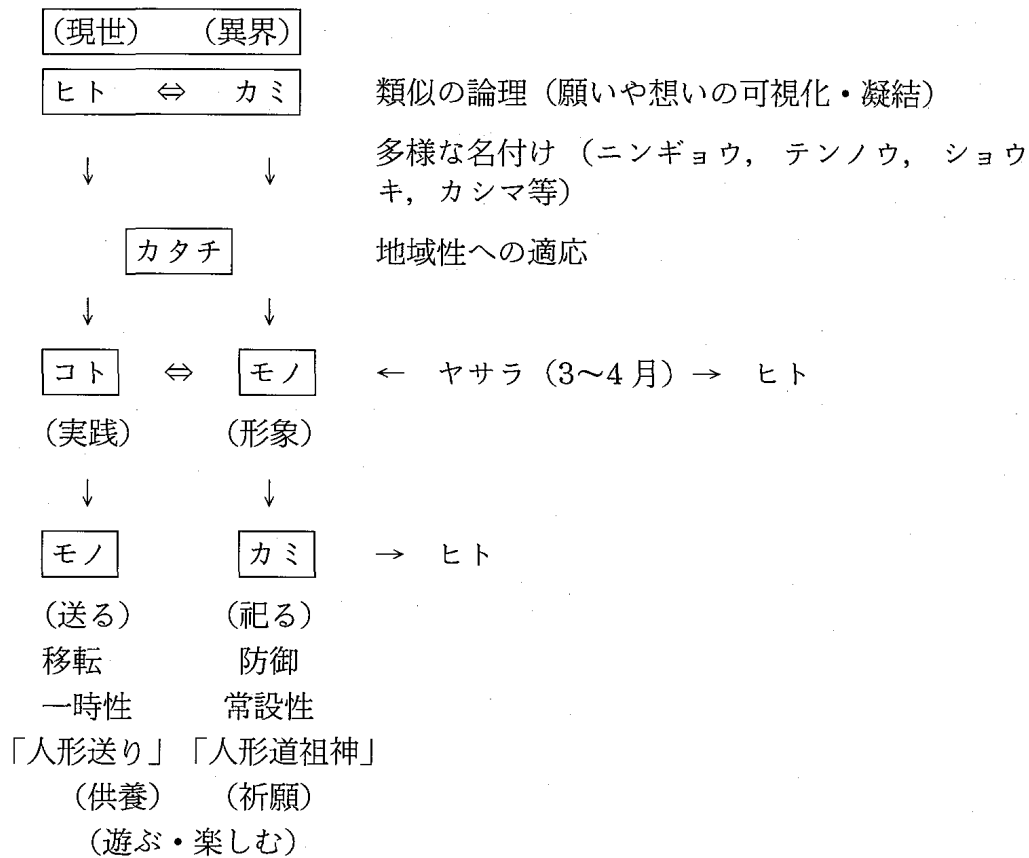


図1 ヤサラをめぐる相関図

ヒト、異界にいとされるカミに求められ、共に「似ている」モノを作り出すという類似の論理によりカタチとしての人形として造形され、願いや想いを可視化し凝結し、多様に名づけられて、地域性に応じて適応する(図1)。原点はヒトガタ(ヒトのカタチ)かカミガタ(カミのカタチ)である。遊佐町のヤサラは、人間がモノとしての人形(形象)に働きかけ、祈願や意図を籠めるコト(実践)としての年中行事として成立し、両者は一体となって空間に作用する。その後、コトとモノは、「送る」対象としての禍々しさや好ましくないものを背負い排除される具体性を帯びたモノと、不可視の力や作用を及ぼすものとしての「祀る」カミを含みこみつつ、モノは「移転」の対象としての単なるモノへ戻って流されたり焼却されて一時的なものに終わるか、カミとしてムラ境に置かれて不幸を「防

御」することにもなる。災厄を移転して身代わりの形代とするか、守護の機能へ転化させるかである。前者は一時的だが、後者は常設的なものにも転化してムラ境を守る大人形や祠の神像にもなる。研究者は、これを「人形送り」(柳田)や「人形道祖神」(神野)と名づけてきた。人形に関しては、異界とのつながりを考慮すれば、供養を主体とするか、祈願を主体とするかという広い展開もあるし、共に現世を中心として「遊ぶ・楽しむ」という要素があることを忘れてはならない。このようなヒト、カミ、コト、モノをめぐる相互作用を通じて形成されたカタチをめぐる観念と実践が人形の習俗を作り出してきたのである。カタチとしての人形それ自体もモノであり、神霊から魔物に至る多義的なモノの世界と連続性を持つ。このような現世でのモノとコト(マツリゴト、ネガイゴト)とヒトが、異界と接合することで織り成す民俗がヤサラなのである。

人形の民俗には権力や社会、政治や経済などの要因も関与し歴史的に持続してきた。しかし、生業の基盤をなす稲作や畑作が形骸化して、生きていくことの証しでなくなってきた現在、ヤサラの意味も失われてしだいに消滅の方向に向かいつつある。後世に伝えていきたい行事の一つであるが、担い手の負担もあり、今後の運営は難しい。村人を結束させ、楽しみという審美的価値に目覚めさせるヤサラの魅力は決して衰えてはいないが、ヤサラの維持は、人々の生き方をどのように再構築するかにかかっている。

人形と空間との関係については、立地は、具体的には、路傍・辻・分かれ道、橋のもと、岡の上、家並みの途切れなどであり、村人の主観と客観のあいだに間主観的に構築された「境界の場所」であるが、複数かつ多様で、複合性を帯び、重層的に形成される。「場所」placeとは、具体性を帯び意味が凝結する特別な「空間」spaceのことである。村の内部には、中心-周縁の関係性ができて、両者を内部として包摂した上で、内部は外部と区別されると同時に外部と結びつけられる。中心-周縁と内部-外

部の組み合わせが基本であり、各所に「点」として表される場所が境界として村人によって集合的に設定される。もちろん、その中で最も強い作用を及ぼすのは内部と外部の間の境界である。人形とは、村人の「境界の場所」への認識をカタチとして表象し、神祭りや厄祓いなどのコトに際して一時的ないしは恒常的に作られる。人形による空間の表象はヒトやカミを表象の源泉としているので、注連縄（道きり、綱吊り）や大草鞋などを吊すことで印づけられる「境界の場所」に比べて、より強くイメージを喚起して、その力を高めるし、移動という実践を伴うことで、流動的かつ柔軟で、動態的な空間表象を生成する。「場所」の流動的な連なりを通して記憶や想いを多義的に表現することが人形を通じて可能になると思われる。

民俗学の研究は民間信仰に重点を置いており、境界を対象としても、場所や空間に観点を向けてこなかった。八木康幸が指摘するように[八木2000:118]、民俗学が関心を向けてきた村境は、明確な領域を前提とした境界ではなく、社会生活を営む村落の内を外から区別するものとして主観的に構築され、「線」ではなく「点」としての場所であり、祀られる信仰対象や儀礼によって可視化されてきた。村境を守る神の祠や祭場があることや、道切りや虫送りの習俗を通して「村人にとって重要な場所」であるとされ、地理上の概念としては考察されなかった。あくまでも民間信仰の究明のための手がかりに過ぎない。今後の課題として重要なのは、空間や場所それ自体への注目であり、境界の設定がいかになされ、どのように維持されるか、村境の外と内での社会秩序の差異がどのように表象されるかの考察である。人々は、不可視のものを空間上に具象化・形象化してカタチとして認識し、自然や人間に関する思考を表現しようとしてきた。民間信仰の解明という古典的な研究よりは、空間や場所に即した理解を試みることで、現代的な変化の実態の解明をより詳細に行うことが可能になるのではないだろうか。

参考文献

- 梅木壽雄 1992『風土記・庄内』庄内の文化をほりおこす会（鶴岡市総務部）.
加藤 栄 1982『服部興屋の歴史と民俗』自家版.
神野善治 1996『人形道祖神—境界神の原像—』白水社.
『鳥海山麓 遊佐の民俗』遊佐町教育委員会, 2006.
藤田順子 2000『雛の庄内 二都物語』SPOON編集部（山形県酒田市）.
藤原弘弥（談）・佐藤晶子（聞書）2003「流し雛『八皿人形』の里」『SPOON』
第12巻12号（2003年3月号）SPOON編集部（山形県酒田市）.
松崎憲三 2004『現代供養論考—ヒト・モノ・動植物の慰霊—』慶友社.
柳田國男 1969（1934）「神送りと人形」『定本柳田國男集』第13巻, 筑摩書房.
八木康幸 2000『民俗村落の空間構造』岩田書院.
「遊佐郷村落誌（上）」『遊佐町史資料』第5号, 遊佐町史編さん委員会, 1979.
「遊佐郷村落誌（下）」『遊佐町史資料』第11号, 遊佐町史編さん委員会, 1988.

註

- 1) 本稿は、神田より子をリーダーとする遊佐町民俗調査（2003年4月～2006年3月）の成果の一部であり、『鳥海山麓 遊佐町の民俗』2006に収録した報告を使用している。
- 2) 樽川のヤサラについては、藤原弘弥氏の聞き書きに負うところが多いが、平成11年（1999）年4月4日のヤサラについての菅原文子さん（当時83歳）の話〔藤原（談）・佐藤（聞書）2003〕や梅木壽雄の報告〔梅木 1992〕も参考にした。
- 3) ヤサラの語源については確実性はない。遊佐町の他の事例として、横手盆地に八皿の事例があり〔神野 1996:152〕。秋田県北秋田郡田代町山田のジンジョ様の祭りでは、旧10月末日（新暦では11月22・23日）にヤサラの神事が行われ、塗り物椀で酒を飲みまわす行事になっており、時期や実践の異なるものがヤサラと呼ばれている。